

# 人工物としての多義構造？ ：多義の实在論を疑ってみる

---

山崎香緒里(お茶の水女子大学[院])

# 多義の定義

---

“Polysemy is commonly defined as the association of two or more related meanings with a single linguistic form.”

(Taylor, 2012:219)

related meanings ⇒ メタファー・メトニミー(・シネクドキ)などの動機づけによって  
示される

(佐藤, 1978、瀬戸, 1986、Lakoff, 1987)

---

今井(1993):

「ネイティブスピーカーが語彙について持っている知識のもう1つの側面は、語彙の様々な派生的な意味が互いにどのように関連しているかという知識である」

- 意味の関連についての知識は、母語話者の言語知識

---

今井(1993)

「外国語学習者は、母語と対応する非常に限られた範囲のみを当該の語の意味として受け入れそれ以外はたとえ文脈から意味が明らかであっても、その語の意味カテゴリーの一部としてではなく、同音異義語の様にみなしてしまうのではないだろうか」

「意味カテゴリーを構造化しているメタファーを理解しないため、いつまでたっても語の適用範囲を拡張できず、点のみからなる痩せた表象から脱皮できない、という悪循環が存在しているのではないだろうか」

- 意味の関連について理解していないと正しい使用ができない

(学習者が多義語を使いこなせないのは、メタファーを理解していないから)

=言語知識(言語の使用を可能にする知識)であると捉えられている

# 多義ネットワーク(多義構造)

---

Brugman(1981) “Story of Over” のときに出現

Lakoff(1987)が引き継ぎ、放射線状ネットワークを主張

⇒その後の研究に影響を与える(多くの研究者を説得する)内容であった

⇒OVERの複数の用法間の関係がどのように示されうるかを論理的に考察した

これに基づいた研究が増えていった

(The Brugman- Lakoff account — which identified a putative central sense of the preposition and a large number of related senses which radiated out from the central sense like spokes of a wheel — spawned a veritable cottage industry of *over*-studies (Taylor, 2012))

森山(2015)などが内省と母語話者への心理実験で「よりよい」ネットワークを書こうとしている

---

森山(2015)

「内省分析で明らかになった多義構造の妥当性について、心理的手法を用いて検証」

内省分析: 言語学者の知識による

心理的手法: 母語話者に対する類似性判断テスト(今井, 1993)による

1つのカードに1つの文を書き、その中のある動詞が類似していると

感じたら同じグループにするというテスト

⇒分析に客観性を持たせるため

---

心理的手法: 今井(1993)

カード分類法による類似性判断 ⇒ 非計量的多次元尺度解析

「被験者は一文が書かれた17のカードからなるセットを与えられ、各文における“wear”の意味の類似性に基づいてグループ分けするように求められた。その際、グループ数と各々のグループ内のカードの数は自由とした。文はすべて文法的にも意味用法的にも正しいこと、グループ分けは“wear”の英文文脈上での意味の類似性に基づいてのみ行われるべきことを教示した。」

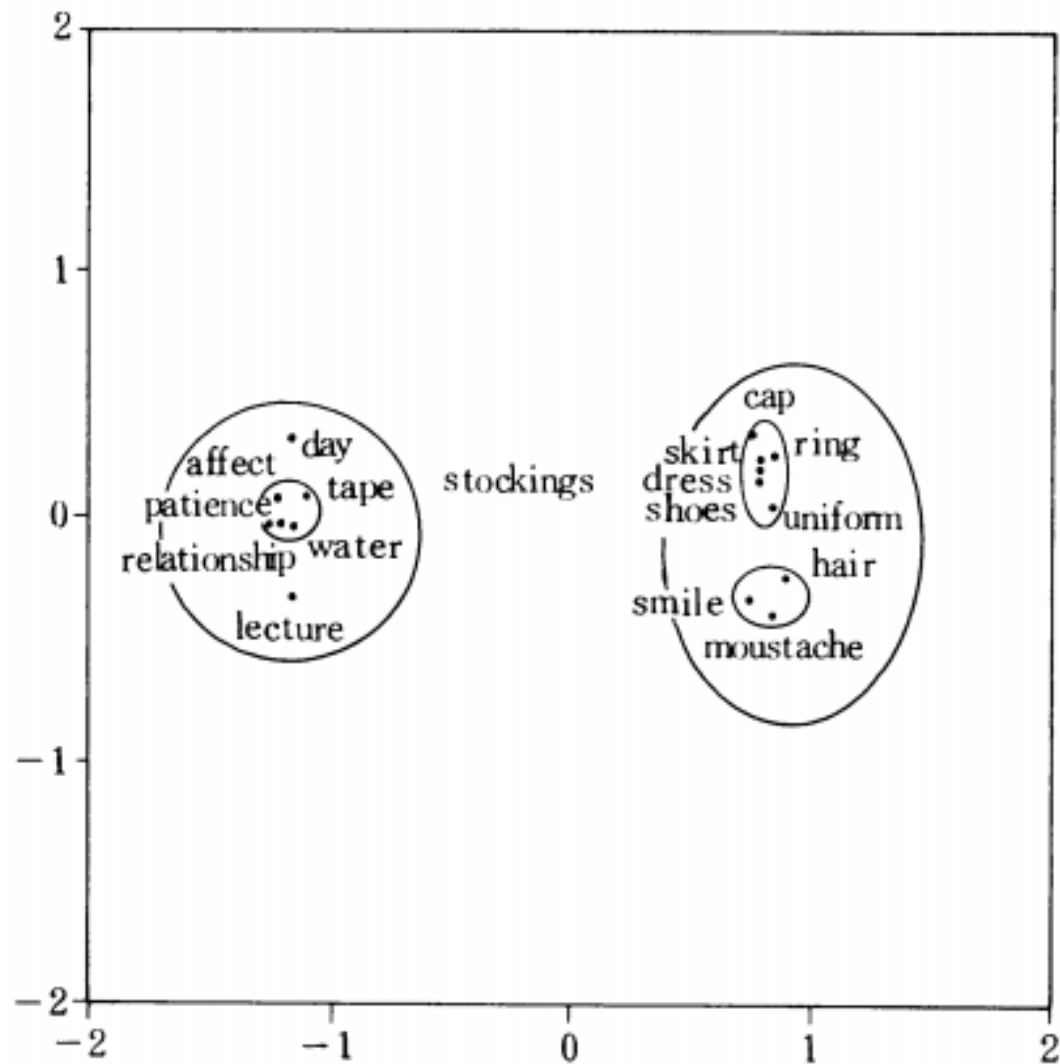


FIG. 1-a Two-dimensional space derived from a similarity matrix of American subjects.

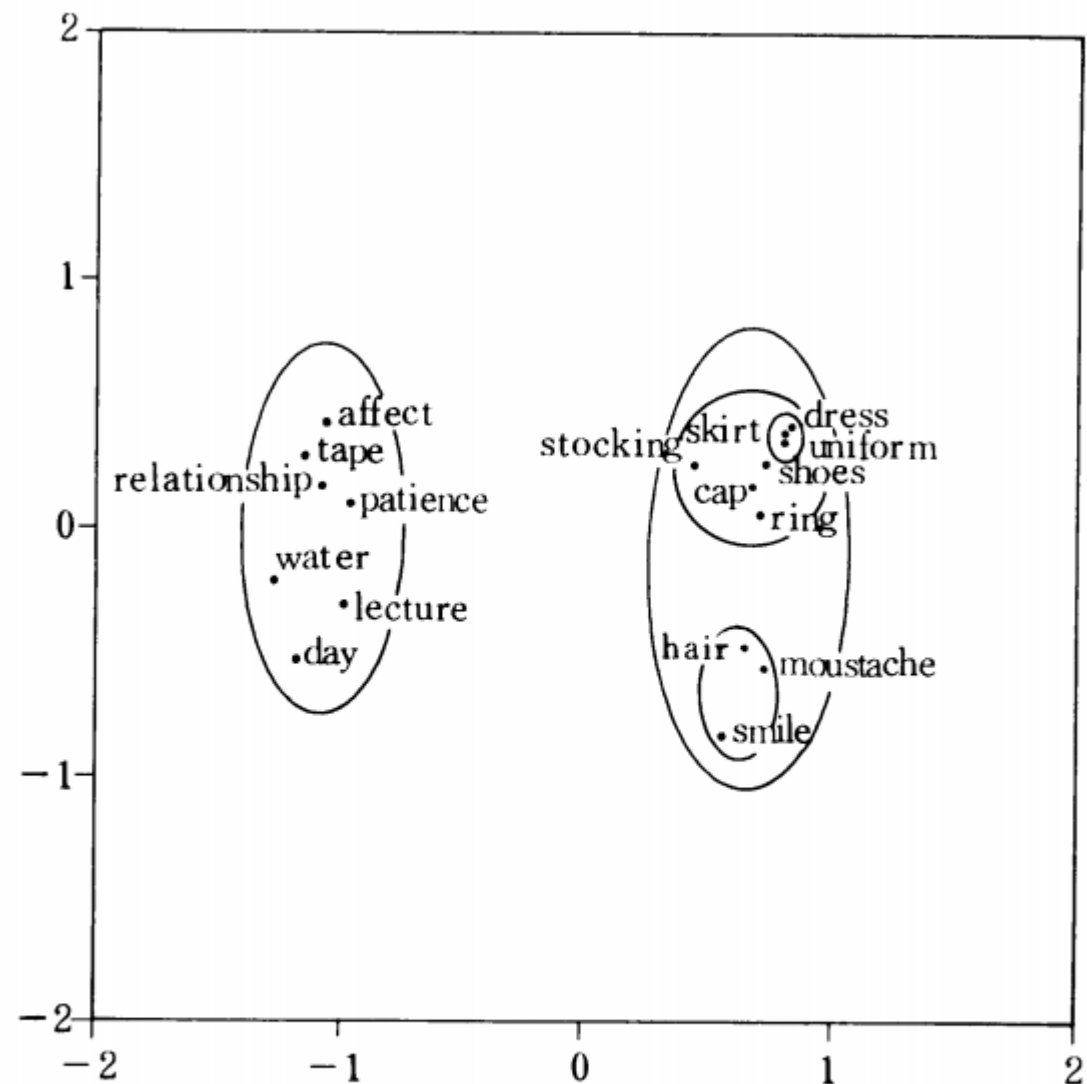


FIG. 1-b Two dimensional space derived from a similarity matrix of Japanese subjects.



---

「アメリカ人の2次元空間においてはクラスターが小さくまとまっており、[...]整然とした構造を呈している。」

「それに比べて日本人の空間では、クラスターが拡散的で、アメリカ人のそのようにまとまりのあるクラスター構造を呈していない。また、アメリカ人での空間に見られるような、比喩転用クラスター内での、プロトタイプを中心にした放射構造もみられない。」

「これは、日本人被験者が、“wear”の比喩転用クラスターの底流となるメタファー、また、刺激文におけるそれぞれの意味用法がプロトタイプの衣類の摩耗のメタファーからそれぞれどの様にして転用されたものなのか、などを理解していないことを示唆しているように思われる。」

(今井, 1993、強調は引用者による)

---

「両者(母語話者と学習者)におけるパターンの大きな相違は、ネイティブスピーカーと外国語学習者の語の意味表象が根本的に異なるものであることを示している」

「(今回の被験者は、)決して水準の低くない大学生であり、そのような被験者でも英語を使う上で最も基本的な語の意味とその用法について、本研究で示したような貧困な表象しか持っていないという結果は、外国語教育における語彙教授法のあり方に重大な問題を提起する」

「外国語教育の初めから、語の意味はカテゴリーとして理解されるべき」

(今井, 1993)

⇒ カテゴリーを理解しないと、きちんと使えない という主張

---

しかし、この実験結果から、自動的にこのような解釈が得られるわけではないのでは？

英語母語話者：実験結果が、まとまっているように見えた

⇒まとまった表象を持っている

英語学習者：実験結果が、まとまっていないように見えた

⇒貧困な表象しか持っていない

⇒ 英語学習者は、英語母語話者と違った表象を持っている

⇒ 英語学習者は、英語母語話者と同じような表象を持つことで学習がうまくいく

＝うまく使える

・・・データのこのような解釈は成り立つのだろうか？？（森山もこれを使ってしまっている）

---

## 結果

言語学者と母語話者の判断は一致した部分と一致しない部分があった

一致した部分: 検証できた

一致しなかった部分: 母語話者に従って修正する or 言語学者の内省をとる

---

## 一致した部分

研究者の内省と同じであったことが「検証」の根拠になっている

⇒両方とも間違いの可能性は排除され、研究者の内省が正しいものと  
決められている

---

一致した部分:

{  
トランプをきる  
花札をきる  
}

{  
カーブをきる  
ハンドルをきる  
}

{  
十秒をきる  
半数をきる  
}

など

---

## 一致しなかった部分の修正

- 母語話者への類似性判断テストの結果を取る部分

両者の意味の隔たりは小さくないことから、下位カテゴリーとはせず独立した語義に改める

- 言語学者の内省の結果を取る部分

本来なら作られるべきメニミーのカテゴリーは、母語話者には気づかれなかった  
本来なら他のものと類似しているはずの例を、異なる類似性によってグループ化していた

⇒分類させてみたら、なんとなく分類はできたが、専門家ほどの細かな正しい分類はできなかった

---

## 一致しなかった部分の修正

- 母語話者への類似性判断テストの結果を取る部分:

<3> 敵をきる、腹をきる <3a>政治の腐敗をきる、世相をきる

⇒母語話者は二つのグループを「遠い」と感じたようだが、研究者は「近い」と感じた  
＝「遠い」ということにする(「独立した語義に改め、<12>とした」(森山, 2015:151))

- 言語学者の内省の結果を取る部分:

<0>糸をきる <1>缶をきる <2>胃をきる <3>敵をきる

⇒母語話者は同じグループにしてしまう傾向だったが、研究者は分ける＝分ける

<4>小切手をきる、領収書をきる <11>トランプをきる、花札をきる

⇒母語話者はこの二つをグループにしてしまう傾向だったが、研究者はしない＝しない



ある中心的な意味があり、それからメタファー、メトニミーなどによってそこから他の意味が拡張している

⇒言語学者にとってはそう考えずにはいられない(言語学者には全て見えるという  
思い込み)

⇒母語話者もそう思っているに違いないという思い込み

“Native speakers build up knowledge of the semantic extension potential of the words in their language through encountering them in multiple discourse situations. It is hardly surprising that language learners, who do not have access to such frequent, meaningful and varied types of communicative interaction, will have relatively impoverished knowledge of meaning extensions. In a recent study (Littlemore and MacArthur, forthcoming) we found that even advanced learners of English have lower levels of awareness than native speakers of senses that lie towards the periphery of a category. “

(Littlemore, 2011)

---

言語学者:意味Bは意味Aから拡張したのだと考えずにはいられない

母語話者:意味Aも意味Bもどちらがどちらから拡張したなどということは考えていない

(Taylor, 2012:229)

⇒しかし、母語話者は語を正しく使用していることには変わらない

⇔今井(1993)やLittlemore(2011)と矛盾

---

野矢(2011): メタファーをメタファーであると認識できる必要はない

Taylor(2012): メタ言語的洞察は、言語の堪能さ、熟達には必須なものではない

⇒「母語話者は関連性を正しく認識できていなかったようである」(森山,2015)

⇒そもそも複数の意味の関係(AはBから拡張したなど)は考えていないのでは？

⇒母語話者への心理実験では、「類似性」により分類することを強要した

⇒どのようにも分類できる

(何と何が似ているのかは、その文脈による

細かくも、おおざっぱにも分類することができる・・・)

⇒しかし、そこには言語学者が考えた「正しい」分類と「間違っただ」分類がある

---

どのようにでも分類できる実験なのに、言語学者から見た「正しい分類の方法」が決まっている

⇒心理実験では、客観性は与えられない

(このテストでは、母語話者のイメージのどこが研究者の期待に合ってどこが合わなかったかがわかっただけ)

⇒この心理実験には内省を検証したり反証したりする力はない

「内省を修正する」根拠はない

---

そもそも、empirical evidenceで決定的なものにはならない

“As Sandra and Rice(1995) have pointed out, empirical evidence, such as it is, is inconclusive.”

(Taylor, 2012)

分類実験の際、クラスターができるのは、被験者のmental lexiconの中で、クラスター間の関係が欠如しているからなのか、タスクによる効果なのかは、不明瞭である。

(Sandra and Rice, 1995)

# STORY of OVERはどうして成功したのか

---

多義ネットワークは内省によってつくられたが、それを心理実験で検証することには根拠がない

⇒では多義ネットワークについてのこれまでの研究は意味がなかったのか？

Brugman(1981)やLakoff(1987)のOVER

⇒多くの研究者が説得され、それに続こうとした なぜだろう？

⇒「話者の知識の中で、意味Bが意味Aから拡張してとらえられている」

のような議論ではない

(意味Bが意味Aから起ころうと意味Cから起ころうと話者の言語使用に影響はない)

---

多義ネットワークは、OVERの実際の使用を論理的に説明するための方法(= 道具主義)として用いられていた

⇒ 道具としてではなく、話者の知識として描かれるとき、何を表したもののなのかわからなくなる。

話者が多義ネットワークを知識として持っていて、中心義からメタファーなどを利用して拡張義を理解したり使用したりしている(Lakoff & Johnson, 1999)とは言えない。

---

「英語の前置詞byの時間用法と空間用法について、メタファーの関係が指摘できないケースもあることと、指摘できた場合でも、だからといって「空間用法の知識を利用して時間用法を生み出す計算を、発話の場で毎回行っている」ということにはならないことを論じた」(平沢, 2015)

⇒多義ネットワークを「話者の知識」として描くことに問題があるのでは？



# 多義ネットワークを構築する

---

多義ネットワークは結局、作る意味があるのだろうか？  
(=存在できるのだろうか？)

これは、多義ネットワークが人間によって作られたから出てきた疑問ではない  
(人間が作った ≠ 実在しない)

c.f. 星座

存在するためには、どうしなければならないのだろうか？

---

存在するものは

それが、直接知覚できたり、検出できたり、人間の言語行動に影響を与えたりする  
(酒井「多義は(どこに)あるか?」)

---

多義ネットワークを話者の知識として描いた場合、それは「存在するもの」の基準を満たさない？

(幽霊が実在するという基準をとるなら、存在するものになりえるかもしれないが...)

⇒直接知覚することはできない

⇒検出もできない

⇒人間の言語行動に影響も与えない(←わかっていなくても正しい使用ができる)

直接知覚できなくても、検出できなくても、人間の行動に影響を与えていなくても、

後に実際に存在しないことがわかって、それを仮定することで何らかの事象を

説明することができれば、「存在する」と仮定する意味がある

---

しかし、話者の知識の表象としての多義ネットワークは、何かを説明することができるだろうか...？

私たちの頭にあるもやっとしたのを、整理できる？

⇒それは使用を集め、論理的な関係を示すことで行われるのでは？

⇒ 話者の知識の表象としての多義ネットワークは、「存在する」とする意味がない

多義ネットワークは、論理的な説明づけのために用いるとき、作る意味がある

⇒混同している？

---

## 森山(2015)の多義ネットワーク

正しい多義ネットワークがあって、(本来、話者の知識では)意味Cが意味Aから拡張したか、意味Bから拡張したかのような問い

⇒本来どちらから拡張していても構わない。どちらでもよい。どちらにしても使用には障りない。

意味構造を描くことで、話者の頭にある知識を妥当な形で示したい

⇒ 多くの人に共有されるイメージを求めることは、妥当な説明を与えることとは異なる

---

Brugman (1981), Lakoff (1987) の多義ネットワーク

頭の中の知識として多義ネットワークがどのように構築されているかという問い  
ではなく  
言語使用がどうなされており、論理的にどう説明できるかという問い

---

つまり、

話者の知識として、似ている/似ていない(関係がある/ない)という議論ではなく、  
論理的な関係性が見いだせるかという議論

⇒「関係性」の捉え方が違う？

森山: 話者が似ていると感じる

Brugman, Lakoff: 意味を決めている要素が共有されているか

(The link between schema 1. VX.NC and schema 1. VX.C is a similarity link,  
where

1. VX is shared)

(Lakoff, 1987)

# 結論

---

道具的使用のための多義ネットワーク:

それぞれの使用が、どのような共通要素を持っているかということを論理的に考察し、使用の整理をすることができる

言語知識としての多義ネットワーク:

仮定することで説明できることが見当たらない

⇒「存在する」という主張は疑わしい

⇒どちらにしても、言語学の作業(言語使用に必要な知識、それがあからかうふう使用する、などという知識を書き出す)ではない



# 参考文献

---

Brugman , Claudia(1981) *The Story of Over : Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon*. New York : Garland.

Lakoff, George. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago and London: University of Chicago Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to Western thought*. New York: Basic Books.

Langacker, R. W. (1990) A Usage-Based Model. In *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.  
Originally published in 1988 in *Topics in Cognitive Linguistics*. 127-161.

Littlemore, Jeannette. (2011) *Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching*. London: Palgrave Macmillan.

Taylor, John R.(2012) *The mental corpus: How language is represented in the mind*.  
Oxford:

Oxford University Press.

---

今井むつみ(1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点」『教育心理学研究』41, 243-253.

佐藤信夫(1978)『レトリック感覚』, 東京:講談社学術文庫.

瀬戸賢一(1986)『レトリック宇宙』(MONAD BOOKS 48), 東京:海鳴社.

野矢茂樹(2011)『語りえぬものを語る』東京:講談社.

平沢真也(2015)「Metaphors We Don't Live By : 現代英語母語話者はbyの時空間メタファーを使って生きているか」『東京大学言語学論集』36, 39-55.

森山新(2015)「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』1: 138-155.



早稲田大学言語学シンポジウム「多義の言語学と哲学」  
2015年12月12日(土)

---

# 討論

山崎香緒里(お茶の水女子大学[院])

# 多義ネットワークのとらえられ方

---

森山(2015)の多義ネットワークの検証の仕方はよくなかったかもしれない

⇒被験者に類似性による分類を強要

⇒どのような細かさで分類したらいいのかなどの指示がなかった

(どのようにでも分類できた)

など

⇒もっといい方法があっただろう、もっとよく表せるだろう.....?

⇒もっと、「母語話者の言語知識を正しく表現できる」方法があっただろう、

ということ?

⇒今回、議論したいのはそういうことではない

---

## 今回議論したいこと

多義ネットワークが、言語知識であると捉えて研究すること自体に問題があるのではないか、ということ（言語使用に何も影響を与えないから）

## 多義ネットワーク

× 人間が持っている知識の表象としての図(实在論)

○ 論理的関係の説明のために用いる図(道具主義)

实在論をとった場合、ネットワークが「存在する」とする意味がないのではないか？

---

実際、認知言語学における多義研究の多くは、

多義ネットワーク＝言語知識 という前提のもと進められている？

「この両者におけるパターンの大きな相違はネイティブスピーカーと外国語学習者の語の意味表象が根本的に異なるものであることを示している」 (今井, 1993: 8)

⇒そのために学習者はうまく使えていない

“[...]new phenomena can be assimilated to existing categories on the basis of perceived similarities” (Lee, 2001:66)

⇒そのために話者は無限で流動的な世界に対応できる(＝無限のことを示すことができる)

「人によっては両語を使い分け、ミチガエルの意味ネットワークから、意味①が喪失しつつあるようだ」 (鷲見, 2013:47)

⇒そのため喪失した人には、意味①が使われなくなる (強調はすべて引用者による)<sup>39</sup>

---

「ネットワークの心的実在性を検証する研究の進展が望まれる」(鷺見, 2013:48)

しかし、

ネットワークは研究者の数だけ増えていき、その結果は収束に向かっていない

“[...] different linguists are likely to make different distinctions between usage types and to propose different networks for the same preposition.”

(Sandra and Rice, 1995: 92)

直接観察不可能な多義ネットワークについて、われわれはどの理論が正しいのか知りえない  
討論」 (酒井「

⇒検証することはできない



---

しかし、どれが「よりいいもの」かという感覚は歴然とあるような気がする...？

⇒A: もっと、「母語話者の言語知識を正しく表現できる」方法（实在論）

B: もっと、「現実の使用をうまく説明できる」方法（道具主義）

⇒A: 先ほどの問題に戻る（こう考えること自体が問題）

B: 論理的関係を納得できるように示せたら成功??

---

## 論理的関係

意味Aと意味Bが、メタファーの関係、メトニミーの関係にある、説明できるということ

意味A→意味B

- ①歴史的な派生
  - ②(歴史的経緯にはかかわらない)使用の説明  
(A→Bというメタファーなどの関係を仮定したら、その2つの関係がよく理解できる)
- 
- ①母語話者の「言語使用を可能にする知識」には含まれる必要がない
  - ②そう仮定すると理解しやすいというもので、理解しない人でも言語使用はできるため、言語知識とは言えない

---

## 言語学が目指していること

「認知言語学は言語使用を可能にする(大部分暗黙の)知識とは何かを明らかにするという目標を生成文法と共有している。」

(『明解言語学辞典』「認知言語学」)

⇒①も②も認知言語学が目指していることと合っていない

⇒多義ネットワークを描くことは、(道具主義であっても)認知言語学が目指していることとずれているのでは？

---

## 狭義の言語知識 vs. 広義の言語知識

- 狭義の言語知識

言語話者が、その知識によって言語使用に影響を受けるような知識

- 広義の言語知識

ぼやっと感じるだけでもよくて、言語話者は、その知識によって言語使用に影響を受けない知識

---

言語知識のとらえ方が違くと、言語学の目標も変わってしまう...

●狭義の「言語(の)知識」

「認知言語学は言語使用を可能にする(大部分暗黙の)知識とは何かを明らかにするという目標を生成文法と共有している。」  
(『明解言語学辞典』「認知言語学」)

●広義の「言語(の)知識」

「なんとなく同じ語に感じられる」という母語話者の直観のでどころを明らかにしようと仮説をたてている。」

Lakoff & Brugman : (同音異義ではなく)複数の意義を1つの語がもっていると感じられる。  
どうして複数の意義が関連しあっていると感じられるのかについて詳細に分析しようとしている  
(長谷川)

---

広義の解釈をとると、直観の出どころを仮定することが目標

こちらをとれば多義ネットワークの研究に意味があると言えるのか？

⇒ 研究者は、直観の出どころを探して仮説を立てる

⇒ 直観の出どころであると仮定した多義ネットワークを描くことが許される

⇒ 出どころを仮定しているだけで、その仮定に誰も影響を受けない

⇒ それでも、目標には沿っているため、ネットワークを描く意味はある

⇒ ?

---

この目標に沿って描かれた多義ネットワークは、どれくらい意義のあるものなのだろうか？

直観の出どころを仮定した多義ネットワークは、言語使用に影響を与えない（広義の解釈を取ると、影響を与える必要はない）。

⇒ 研究者によって仮定が様々でも、それが「直観の出どころを仮定したもの」であったら許される

⇒ 乱立を許す

---

乱立した多義ネットワークに歴然と優劣があるような気がする？

広義の解釈を取るなら、

母語話者の直感をよりよく仮定できたものが優れている

⇒ どうやって直観をよりよく仮定できたと決めることができる？

⇒ 母語話者に尋ねる？言語学者がいいと思ったものがいいもの？



---

実験によって、正しいネットワークが示されることはない(正解はない)

“We would like to emphasize that the experimental evidence reported on below was not intended to confirm or disconfirm particular network models, or to set up a network on the basis of empirical results.”

(Sandra and Rice, 1995: 106)

---

(研究者にも、)優劣を判断する基準がない(優劣を判断できない)

(優劣があるとすれば、どれが好みか、という程度では?)

⇒ 好みのネットワークを描くことに、どれだけ意味がある?

⇒ 個人の直観にあっていれば、様々に好みのものを書いていい?

(収束に向かわないことは、これまでの研究から見て取れる)

広義の解釈をとって、乱立を認めないことは矛盾

様々に描かれたネットワークに優劣をつけられず乱立＝相対主義への帰着?

## ◆ 狭義の言語知識

- 多義ネットワークは言語知識であるという前提のもとで行われる研究

「認知言語学は言語使用を可能にする(大部分暗黙の)知識とは何かを明らかにするという目標を生成文法と共有している。」に添おうとはしているものの、言語知識としての多義ネットワークは存在すると仮定する意味がない(言語使用に何の影響も与えていない)。

- 多義ネットワークは論理的関係を示す道具として使用されるとして行われる研究

論理的関係を示すことは可能だが、「認知言語学は言語使用を可能にする(大部分暗黙の)知識とは何かを明らかにするという目標を生成文法と共有している。」に添えない(道具的に使用されるネットワークは、言語知識に入らない)。

## ◆ 広義の言語知識

「なんとなく同じ語に感じられる」という母語話者の直観のでどころを明らかにしようと仮説をたてている。」に沿うと、多義ネットワークの乱立を許し、その中の優劣もつけられない。  
⇒ 相対主義に帰着してしまう

# 参考文献

---

Lee, David (2001) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Sandra, Dominick and Sally Rice (1995) “Network analysis of prepositional meaning: Mirroring whose mind—the linguist’s or the language user’s?”, *Cognitive Linguistics* 6, 89-130.

今井むつみ(1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点」『教育心理学研究』41, 243-253.

鷺見幸美(2013)「多義性の意味ネットワーク」, 森雄一、高橋英光(編著)『認知言語学基礎から最前線へ』東京:くろしお出版, 29-52.

森山新(2015)「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』1: 138-155.

『明解言語学辞典』(2015) 東京:三省堂.

